

「イエシュアの祈り～前篇～」

ヨハネの福音書 17:1～10

はじめに

イエシュアは十字架にかかれる前夜、弟子たちとの最期の晩餐である過ぎ越しの食事を終えた後、ご自分がこの世を去って父のみもとに帰ることについて語られました。それによって助け主である真理の御霊、聖霊が遣わされることが語られ、その聖霊の助けを得てこの世の迫害、患難に立ち向かいなさい、「勇敢でありなさい。わたしはすでに世に勝ったのです。」と語られ、弟子たちを励まされました。

今回はその続きになるのですが、その様相はこれまでとまったく違います。なぜならこの 17 章の内容はすべてイエシュアから御父である神様に向けての祈りで埋め尽くされているからです。しかし本来祈りとは、人に聞かせるためのものではなく、神様だけに向けて話すものですが、ここにその内容が記されているということは、筆者であるヨハネはもちろんのこと、イスカリオテのユダを除くすべての弟子たちがこの祈りの言葉を聞いたと考えられます。つまり御父と御子の、その親密な交わり、会話を聞いたのです。それまでイエシュアは御父と交わる時はこのように祈っておられました。

【新改訳改訂 3】

マルコ

1:35 さて、イエスは、朝早くまだ暗いうちに起きて、寂しい所へ出て行き、そこで祈っておられた。

御子イエシュアと御父の交わりは「寂しい所」すなわち人から離れた場所、密かな隠された場所においてなされてきました。ですからそこで何を祈っておられたのか、という内容については一切記されていません。しかし今回の箇所は違います。その祈りの内容が明確に記されています。つまり御父と御子の、その親密な交わりの中に、今までは立ち入ることも、盗み聞きすることさえも許されませんでした。時至って弟子たちがこの交わりの中に招き入れられたのです。まさに以下の御言葉のとおりです。

【新改訳改訂第 3 版】

ヨハネ

15:15 わたしはもはや、あなたがたをしもべとは呼びません。しもべは主人のすることを知らないからです。わたしはあなたがたを友と呼びました。なぜなら父から聞いたことをみな、あなたがたに知らせたからです。

御父と御子の交わりの中に招き入れられること、その成就、完成はもちろん神様の国、御国において成されるものですから、ここに記されているのはその型です。しかしそれは信仰によって受け取るべき神様のご計画、約束です。その神様の「友」となるという約束の故にこのヨハネ 17 章は記録されているのです。もう一度言いますが、今回のこのヨハネの福音書 17 章は、すべて御子であるイエシュアの、御父に向けての祈りです。そこには一切の社交辞令のようなものや、形式ばったうわべだけの文句や台詞はありません。イエシュアの心

からの祈り、思い、願い、まさにイエシュアの本音が綴られています。つまりこの 17 章を読むことで私たちはイエシュアの心を覗き見ることができるのです。それでは期待をもって読んでいきましょう。

1. 目を天に向けて

【新改訳改訂第3版】

ヨハネ

17:1 イエスはこれらのことを話してから、目を天に向けて、言われた。「父よ。時が来ました。あなたの子があなたの栄光を現すために、子の栄光を現してください。

皆さんは祈る時、いつもどのような姿勢をとるでしょうか。殆どのクリスチャンは目を閉じ、手を組んで祈ります。しかし実はそのような祈りの姿勢は、聖書のどこにも記されていません。ここでイエシュアは「目を天に向けて」祈られました。では私たちもこのように目を開けて上を向いて祈らなければならないのでしょうか。それも一つの解釈なのかも知れませんが、もし私たちが、祈る時は必ず目を閉じて手を組まなければならないと考えているなら、聖書を読む限り、それは間違いであると言えます。しかし重要なのはどのような姿勢、体勢で祈るかということではなく、どこに目を向けて祈るかということです。イエシュアは天に目を向けて祈られました。実際に目を開いたまま上を向いて祈られたのかも知れませんが、しかしイエシュアが見つめておられたのはただの上ではなく「天」です。なぜならそこに「御父」がおられるからです。ですからイエシュアは「目を御父に向けて」祈られたのです。実際にイエシュアは「父よ」という呼びかけから祈り始められました。これは何もイエシュアだけに限られたことではありません。神様を信じるすべての者は、このように祈らなければならないのです。

【新改訳改訂3】

マタイ

6:9 だから、こう祈りなさい。『天にいます私たちの父よ。御名があがめられますように。

ルカ

11:1 さて、イエスはある所で祈っておられた。その祈りが終わると、弟子のひとりが、イエスに言った。「主よ。ヨハネが弟子たちに教えたように、私たちにも祈りを教えてください。」

11:2 そこでイエスは、彼らに言われた。「祈るときには、こう言いなさい。『父よ。御名があがめられますように。御国が来ますように。』

このように、祈りとは天におられる御父に向かって、目を向けてなされるものなのです。もちろん肉眼で御父を見ることはできません。ですからイエシュアの「目を天に向けて」とは、どのような体勢で祈らなければならないのかという言及ではなく、誰に向かって祈るのかということについてであり、言うならばそれは「心の姿勢」であり、目に見えない姿勢です。天におられる御父に向かって祈るという、この事実は祈りにおいて最も重要です。もし私たちが一体誰に向かって祈っているのかを理解しないまま祈っているとすれば、それはまるで宛先の住所を書かないで手紙を投函するようなものです。たとえその手紙の内容がどんなに素晴らしいものであろうか、何十枚、何百枚という膨大なものであろうか、宛先のない手紙は決して届くことはありません。逆にたった一言を記しただけのハガキ一枚であったとしても、宛先がはっきりと記されているならそれは届け

られるのです。つまり目を開けていようが、立って歩いていようが、どんなつたない言葉であろうが、天におられる私たちの父に向かって祈るなら、その祈りは、まさに聞き届けられるのです。このように天におられる御父に向かって祈ることこそが重要であるということを示すために、イエシュアは初めに「目を天に向けて…父よ」と祈り始められたのだと考えられます。

そしてイエシュアは「時が来ました」と言われました。これはもちろんイエシュアが十字架にかかれることを指し示しているとも考えられますが、ここまでの文脈から考えるならばそれは

【新改訳改訂第3版】

ヨハネ

13:1 …この世を去って父のみもとに行くべき自分の時が来た…

ということを指し示していると考えべきです。もちろんそれは十字架にかかり、そして死ぬことが大前提ですが、先に述べたようにイエシュアはただ天におられる御父だけに目を向けて祈っておられるのです。つまり目先の困難や試練に目を向けて祈っておられるのではなく、果たすべき事をなし終えたその先にある、御父との交わりに目を留めておられるのです。ここにも私たちが倣うべき祈りの姿勢が記されています。私たちは目先の願いや求めがある時によく祈ります。それがたとえ「天におられる私たちの父よ」と祈り始めたものであったとしても、実際には私たちの目は、自分の願いや求めに向けられていることが多いのです。目を天に向けて、御父に向かって祈るとは、そこに私たちの目指すべきゴールがあるからです。御父から離れ、朽ちる肉体を身にまとい、罪と死の苦痛に支配された地上に遣わされたイエシュアにとって、この「時」すなわち「この世を去って父のみもとに行く」ことがどれほど待ち遠しいことであったか図り知れません。私たちの祈りも本来こうあるべきなのです。つまり私たちの祈りは、この世で健康で快適な暮らしをして長生きすることに向けられるものではなく、「父のみもとに行く」こと、神様と人の親密な交わり、神様とともに永遠に生きること

に目を留めるものでなければならないのです。イエシュアはまさにその「時」、その交わりに目を向けて祈っておられたと考えられます。

しかしだからと言ってイエシュアは、どうでもいいから一刻も早く御父のみもとに行くことだけをただ考えておられたわけではありません。御父に遣わされた者としての、その果たすべき役割があることを知っておられました。それが「あなたの子があなたの栄光を現す」という言葉に集約されています。イエシュアは「あなたの子があなたの栄光を現すために、子の栄光を現してください。」と祈られました。「栄光を現す」というこの言葉は聖書において非常に多く使われている表現ですが、聖書そのものや、被造物つまり神様に創造されたすべてが神様の栄光を現すために存在しているとさえ言うことができる、それだけに非常に意味の深い言葉です。そのすべてを述べるのに必要な知識が今の私には与えられていません。ただこの文脈の中で「栄光を現す」という言葉が何を指し示しているのかを見たいと思います。ここではそれが次のように言い換えられていると考えられます。

2. 栄光を現す

17:2 それは子が、あなたからいただいたすべての者に、永遠のいのちを与えるため、あなたは、すべての人を支配する権威を子にお与えになったからです。

先の 17:1 とこの 17:2 の内容がパラレリズム、言い換え表現によって説明されていると考えられます。つまり以下ようになります。

ヨハネ 17:1 →	ヨハネ 17:2
「あなたの子があなたの栄光を現すため」 →	「子があなたからいただいたすべての者に永遠のいのちを与えるため」
「子の栄光を現す」 →	「すべての人を支配する権威を子に与える」

このように、「あなたの栄光」すなわち御父の栄光とは、御父がその主権によってお選びになったすべての者、つまり神様を信じる「すべての者に永遠のいのちを与える」ことを指し示しています。またその御父の栄光が現されるために「子の栄光を現す」ことを祈られました。それは「すべての人を支配する権威を子に与える」こと、すなわちすべてのものがイエシュアにひざをかがめ、主と告白するようになることです。

【新改訳改訂第3版】

ピリピ

2:10 それは、イエスの御名によって、天にあるもの、地にあるもの、地の下にあるもののすべてが、ひざをかがめ、

2:11 すべての口が、「イエス・キリストは主である」と告白して、父なる神がほめたたえられるためです。

このように「子の栄光が現される」こと、つまり「すべての人を支配する権威を子に与える」ことすなわちイエシュアはメシアでありすべてのものの主となれることには目的があるのです。それは「父なる神がほめたたえられるため」であり、主であり御子であるイエシュアによって「御父の栄光を現す」ためであり、神様を信じる「すべての者に永遠のいのちが与えられるため」なのです。ではその「永遠のいのち」とは何であるかが次に記されています。

17:3 その永遠のいのちとは、彼らが唯一のまことの神であるあなたと、あなたの遣わされたイエス・キリストとを知ることです。

「永遠のいのち」とはすなわち「神様を知る」ことであるとイエシュアは述べておられます。ここで「知る」と訳されているヘブル語のヤード(יָדַע)は、何か少し理解できたというような類のものではなく、神様が「知る」ように「知る」こと、つまり知らないこと、解らないことが一つもない、すべてを「知っている」ということです。以下の御言葉はこのヤードが最初に使われた箇所です。

【新改訳改訂第3版】

創世記

3:5 あなたがたがそれを食べるその時、あなたがたの目が開け、あなたがたが神のようになり、善悪を知る

よくなることを神は知っているのです。」

つまり「神様を知る」とは、神様について知らないことが一つもない、神様という存在のすべてを知るということであり、神様との間に何の隔たりも隠し事もない完全な交わり、関係が築かれることを意味します。それがイエシュアの言われる「永遠のいのち」であり、その「永遠のいのち」が神様を信じるすべての者に与えられることが御子であるイエシュアによって御父である「神様の栄光を現す」ということであると考えられます。このように、「栄光を現す」とは、「神様との完全な交わり、関係」が築かれることを指し示していると言えます。つまり 17:1 で述べられた「御父の栄光」は「御父との完全な交わり、関係」、そして「子の栄光」は御子である「イエシュアとの完全な交わり、関係」と言い換えることができると考えられます。このように「栄光」という言葉が「交わり、関係」を指し示すものであるならば次の御言葉もこのように解釈することができます。

17:4 あなたがわたしに行わせるためにお与えになったわざを、わたしは成し遂げて、地上であなたの栄光を現しました。

地上で御父の「栄光を現す」ためにイエシュアが成し遂げられたわざとは、ご自分を通して、イエシュアを信じることによって救われるという神様のご計画を完成させることであり、それはつまり人の罪によって破壊されてしまった神様と人との「交わり、関係」を回復し、そして完成させることだと言えます。ですからこの箇所からも「栄光」という言葉が「交わり、関係」を指し示していると言えます。そして更に次の御言葉からも同様の答えを導き出すことができます。

17:5 今は、父よ、みそばで、わたしを栄光で輝かせてください。世界が存在する前に、ごいっしょにいて持っていましたあの栄光で輝かせてください。

「栄光」とは、太陽のように明かりのように眩しく輝くことではありません。目もくらむような光なら人間でも作り出すことができます。イエシュアは神々しい光に包まれたかたのではありません。父の「みそばで」、また「ごいっしょにいて」とあるように、天の御父のみそばを離れ、朽ちる肉体を持ち、罪と死の苦痛に支配されたこの地上においてではなく、天において世界が存在する前に保たれていた御父と御子の完全な「交わり、関係」に戻りたかったのだと考えられます。それがここでイエシュアが「栄光で輝かせてください」と祈られた真意であると考えられます。

3. 神様のもの

17:6 わたしは、あなたが世から取り出してわたしに下さった人々に、あなたの御名を明らかにしました。彼らはあなたのものであって、あなたは彼らをわたしに下さいました。彼らはあなたのみことばを守りました。イエシュアが御父の栄光を地上で現したことを、ここでは「人々に、あなたの御名を明らかにした」と言い換えられていると考えられます。なぜなら「御名」とは単なる名前、看板ではなく、神様の全存在すなわち全人格とそのご意志と働きのすべてを指し示すものだからです。それが明らかにされることとは、神様との間に「完全な交わり、関係」が築かれることでなくて何でしょう。それが「栄光を現す」という言葉の意味であることは先に述べた通りです。そして神様との間に「完全な交わり、関係」が築かれるとは「あなたのもの」すなわ

ち御父である「神様のもの」になるということであると述べられています。そしてそれは同時に、御子であるイエシュアに与えられましたので、「イエシュアのもの」となることとも言えるのです。そして「神様のもの」、「イエシュアのもの」となる人々とは、神様の「御言葉を守る」人々であることも言及されています。しかしここで誤解してはならないのが、イエシュアは常に神様のご計画の完成に目を留めながら話しておられるということです。つまり神様の「御言葉を守る」人々とは、今現在この地上において、努力して忍耐して神様の御言葉ががんばって守る人々という意味ではなく、神様のご計画の完成すなわち神様との「完全な交わり、関係」が築かれ、「神様のもの」「イエシュアのもの」となるその時初めて「彼らはあなたのみことばを守る」ようになるということです。そもそも今の罪の性質を持ったままの人が、自らの努力やがんばりで神様の御言葉を完璧に守ることなど絶対に不可能です。ですから神様はその一方的な恵みと憐みのゆえに、ただご自身の御業によって私たちが「世から取り出して」下さったと述べられているのです。

4. みことば

17:7 いま彼らは、あなたがわたしに下さったものはみな、あなたから出ていることを知っています。

「いま彼らは」すなわちその場にいたイエシュアの弟子たちは、神様についてすべてを知らされていたわけではありませんでした。ただ一つのことについては知らされていました。それは、わたしのものは「みな、あなたから出ている…」とあるように、イエシュアは神様の御子であり、神様から遣わされた御方であるということだけは知っていました。

17:8 それは、あなたがわたしに下さったみことばを、わたしが彼らに与えたからです。彼らはそれを受け入れ、わたしがあなたから出て来たことを確かに知り、また、あなたがわたしを遣わされたことを信じました。

「あなたがわたしに下さったみことば」とは何でしょうか。言葉のことをヘブル語でダーヴァール(דָּבָר)と言いますが、このダーヴァールが聖書で最初に使われた記述にそのヒントがあると思われます。

【新改訳改訂第3版】

創世記

11:1 さて、全地は一つのことば、一つの話しことばであった。

11:2 そのころ、人々は東のほうから移動して来て、シヌアルの地に平地を見つけ、そこに定住した。

11:3 彼らは互いに言った。「さあ、れんがを作ってよく焼こう。」彼らは石の代わりにれんがを用い、粘土の代わりに瀝青を用いた。

11:4 そのうちに彼らは言うようになった。「さあ、われわれは町を建て、頂が天に届く塔を建て、名をあげよう。われわれが全地に散らされるといけないから。」

11:5 そのとき主は人間の建てた町と塔をご覧になるために降りて来られた。

11:6 主は仰せになった。「彼らがみな、一つの民、一つのことばで、このようなことをし始めたのなら、今や彼らがしようと思うことで、とどめられることはない。」

これは「バベルの塔」の出来事として有名な箇所ですが、人々は天に届く塔を建て、自分たちの力を示そうとします。そのきっかけとなったのが一つのダーヴァールすなわち「ことば」でした。「一つのことば」とは一

つの民、一つの国とも言い換えることができますが、このバベルの塔の出来事が示すように「ことば」には本来「一つになって何かを建て上げる」「一つのもを建て上げる」という意味があると考えられます。「あなたがわたしに下さったみことば」すなわち御父が御子にお与えになった「みことば」とは、神の町、都である「神様の国、御国」を建てるとのご計画において「一つ」になるということであったと考えられます。

このように「ことば」もまた伝える、そして受け取ることによって自分と他者の思いが「一つ」になるための「交わり、関係」を指し示すものであると言えます。つまり御父と御子が一つであるとは、「ことば」による「完全な交わり、関係」によって成り立っていると考えられます。そして述べたように、この「ことば」ダーヴァールには「建て上げる」という目的が伴っているのです。

バベルの塔は、人々が自分たちのために自分たちの手によって建てようとしたために止められました。なぜならそれは人々が名を上げるために建てられようとしたものであったからです。そのようなものは必ず滅び去っていきます。しかし人は神様に似せて造られたと書かれているように、神様こそが、ご自分の御名があがめられるために、ご自分のために「神様の国、御国」を建てようとしておられるのです。そしてそれはただ神様ご自身によって、御父が御子と「一つになって建て上げる」というものです。それが御父が御子に下さったダーヴァール「みことば」が指し示すものだと考えられます。弟子たちはその「みことば」を受け入れました。すなわち「神様の国、御国」のご計画を受け入れたということです。「わたしがあなたから出て来たことを確かに知」ること、すなわちイエシュアが御父である神様から遣わされた御方であることを信じるとは、ダーヴァールが指し示すように「神様の国、御国」を建て上げる神様のご計画を受け入れることを意味していることが述べられていると考えられます。

5. 執り成しの祈り

17:9 わたしは彼らのためにお願いします。世のためにではなく、あなたがわたしに下さった者たちのためにです。なぜなら彼らはあなたのものだからです。

イエシュアが御父に願っておられます。しかしそれは「彼らのため」すなわち弟子たちのためにです。御父と御子は「完全な交わり、関係」においてまったく一つですから、本来ならば願いごとをする意味も必要ありません。ですからここでのイエシュアの願いとは、本来ならば弟子たち自身が願うべきことなのです。しかしこの時点では「神様の国、御国」が建て上がり、神様との間に「完全な交わり、関係」が築き上げられていないため、イエシュアが弟子たちに成り代わって願っておられるのです。これは「執り成し」の祈りとも呼ばれるものです。

【新改訳改訂第3版】

ローマ

8:30 神はあらかじめ定めた人々をさらに召し、召した人々をさらに義と認め、義と認めた人々にはさらに栄光をお与えになりました。

8:34 罪に定めようとするのはだれですか。死んでくださった方、いや、よみがえられた方であるキリスト・イエスが、神の右の座に着き、**私たちのためにとりなしていただきますのです。**

8:38 私はこう確信しています。死も、いのちも、御使いも、権威ある者も、今あるものも、後に来るものも、力ある者も、

8:39 高さも、深さも、そのほかのどんな被造物も、私たちの主キリスト・イエスにある神の愛から、私たちを引き離すことはできません。

この時の弟子たちだけでなく、今日神様を信じるすべての者が、天において神様の右の座に着いておられるイエシュアのこの「執り成しの祈り」の恩恵を受けています。この祈りは私たちのそれとははるかに次元が違います。このイエシュアの執り成しの祈りの前には、「死も、いのちも、御使いも、権威ある者も、今あるものも、後に来るものも、力ある者も、高さも、深さも、そのほかどんな被造物も」無力です。まさに宇宙最強の祈り、これぞ神レベルの祈りです。この祈りによって私たちの信仰は守られているのです。今あなたの信仰生活を支え、守っているのは、断じてあなた自身の力ではない、この神様の右の座に着いておられるイエシュアの執り成しの祈りの力であることを忘れてはならないのです。また逆にもしあなたがどんなに「神様の愛」から離れようとしても、逃れようとしても、あなたが「神様があらかじめ定めた人々」であるなら、絶対に離れることはできません。なぜならあなたはすでに「神様のもの」だからです。

6. イエシュアは神である

17:10 わたしのものはみなあなたのもの、あなたのものはわたしのものです。そして、わたしは彼らによって栄光を受けました。

イエシュアが語られた「わたしのものはみなあなたのもの」と「あなたのものはわたしのもの」というこの二つの言葉は、似ているようで別々のメッセージを持っているようにも思われます。すなわち「わたしのものはみなあなたのもの」とは、ご自分が御父である神様から出た者、使命を与えられ、ただそれだけを果たすために遣わされた者であるという意味だと考えられ、また「あなたのものはわたしのもの」とはイエシュアもまた御父と同じように神様と呼ばれるべき存在であり、つまり「イエシュアは神である」というメッセージを持っていると考えられます。

そして先に述べたように、この御言葉からも「栄光」とは、「神様のものになる」ということであり、それはすなわち神様との「完全な交わり、関係」を指し示すものであることが解ります。イエシュアが「彼らによって栄光を受ける」とは、イエシュアが神様と御父と御子という「完全な交わり、関係」を持っておられる御方であるということが「彼ら」すなわち神様を信じるすべての者によって信じ受け入れられているということだと考えられます。

最後に

これらのイエシュアの祈りには、御父である神様と御子であるご自分との強い結びつきと関わりを強調する表現であふれていました。同時にそれは神様を信じるすべての者にも開かれた、約束された希望であることが示されていました。神様のご計画の完成として、神様が建て上げようとしておられる「神様の国、御国」とは、場所や建物を指すのではなく、神様と人との「完全な交わり、関係」が築き上げられた状態を指し示すものであるということ覚えなければなりません。これさえあれば、この関係さえあれば、その他のすべての必要が

与えられるとイエシュアは語られました。

【新改訳改訂3】

マタイ 6:33 だから、神の国とその義とをまず第一に求めなさい。そうすれば、それに加えて、これらのものはすべて与えられます。

今回の文脈から、「神の国とその義」とは、神様との「完全な交わり、関係」であると言えます。そしてそれによって私たちの求めるすべてのものが与えられるのです。しかしこれはよく考えてみればごく当たり前のことなのです。たとえばもしあなたがお腹がすいて、パンが食べたくなくなったとしても、パンに向かって「食べさせてください」とは言わないでしょう。そんな人はいません。誰もがパンを与えてくれる人のところに行ってそれを求めるはずです。しかしもしその人との関係がない、もしくは悪ければパンをもらうことはできないでしょう。ですから私たちにとって最も重要なことは、何を求め、何を手に入れるかではなく、誰とどのような関係を築くかということなのです。つまり神様との「完全な交わり、関係」を築くことこそが私たちにとって最も必要なことであるということを、今一度確認していただきたいのです。聖霊の助けを受けて、イエシュアはこの地上におられた間も、御父との「完全な交わり、関係」を保っておられました。このようにイエシュアは私たちに模範を示されたのです。ですから私たちも、この地上においても御父である神様と御子イエシュアとの「完全な交わり、関係」を求めて行きましょう。私たちのうちに、聖書の御言葉を通して働かれる、助け主である聖霊の導きがますます豊かにされていきますように。そして御国が来ますように。